

平成 21 年 6 月 16 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006-2008

課題番号：18520068

研究課題名（和文） 古代ギリシア医学における魂論の展開

研究課題名（英文） The Concept of the Soul in Ancient Greek Medicine

研究代表者

木原 志乃 (KIHARA SHINO)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：10407166

研究成果の概要：

初期ギリシア哲学および医学における身体観の思想史的展開を、知の成立の問題との関わりに注目しながら考察した。とりわけヒポクラテスからペリパトス派にいたるまでの哲学と科学の対立・連携の中で、身体および魂の相関性の問題を踏まえ、身体的調和が知性的活動と結びついた「病い」として強調されてきた「メランコリア」概念を中心にとりあげ、「病い」とは何かという本質的問いかけを射程にいれつつ吟味した。また、いくつかの初期ギリシア哲学に関する研究書、およびガレノスの著作の翻訳作業を進め、関連領域の諸議論をより広範囲に多角的な視野で捉え直そうと試みた点が本研究の成果である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,600,000	300,000	1,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：比較思想史、古代ギリシア医学思想、古代ギリシア哲学

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究のテーマは、ヒポクラテスやガレノスの医学理論が、ソクラテス以前の哲学あるいはアリストテレスやストア派の自然哲学とどのようなかたちで思想的基盤を共有していたのかというもので、これは従来の思想史研究において十分に考察されてこな

かったものであった。ヒポクラテスなど初期ギリシアの医学理論の示唆する諸問題に答えようとしてさまざまな論拠がギリシア哲学者の側から提出され、また逆に医学者の側からの論拠の提出もなされてきたのだから、この研究は決して表層的な対比にとどまるものではない。魂と物質、その実在性をめ

ぐる哲学的問題に関して、ギリシア医学は哲学理論と密接な繋がりを持ちつつも、ある面では観察と離れた抽象化に警鐘を鳴らしている。この点をふまえた上で、現代における科学的諸問題を考察する上での論点を見据えながら、ギリシアにおける哲学と医学の関わりに注目することが本研究の新規性であり、独創性であった。

(2) 本研究は、近代的な物質概念に基づいた「科学的思考」に依拠した視点を再考することでもあった。ガレノスを中心とした古代ギリシア医学における有機的・身体的観を現代の自然科学の物質主義的・機械論的・身体的観と比較考察することにより、現代の科学文明において改めて問いなおされている「生命」や「身体」概念を再考するための新たな視座の提供が目指された。

(3) 古代ギリシアにおける哲学と医学との対立と連携についての諸問題を正面からとりあげた国内研究は、いまだわずかであった。一方、国外研究の動向においてはギリシアにおける医学と哲学の相互研究は、J. ロングリッグや V. シュターデン、P. Van der エイクや G. E. R. ロイドなど幅広い研究者たちによって支持されていた。さらに当初、海外の研究では、P. Van der エイクの研究を中心に、ディオクレスなどをはじめとした古代の医学テキストが編纂されて数多く出版されており、古代ギリシア医学史は新たに注目されつつある研究領域であった。また2005年7月にはイギリスのエクセター大学にてガレノスについての非常に充実した学会が開かれたことも記憶に新しい。これらの最新の研究動向を踏まえて、哲学研究の視点からも、医学史研究の視点からも、さまざまな角度における有意義な研究成果を期待できるものであると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代の科学文明において改めて問いなおされている「生命」や「身体」理解の根源に立ち返り、特に古代ギリシア哲学と医学の対立・連携関係の中で魂概念の成立と変容の歴史を探求することである。魂概念はソクラテス以前の自然哲学のなかで「生命原理」としてはじめて用いられ、運動の原因や知性的活動を表すものとして、さらにはプラトンに至っては「自己」を表すものとして理解されてきた。そして「魂」が「身体」(物質)に対してどのような位相にあるのかという問いに答えることは、古代ギリシア哲学の重要な課題であった。物質や魂をめぐるこの哲学的問題はヘレニズム期を経て、ローマ期のガレノスの医学的著作において詳細に検討し直される。ギリシア医学の集大成でもあるガレノスはヒポクラテスの医学理論を評価しつつ、アリストテレスやストア派の魂

論に重要な修正を加えている。生命や身体をいかに説明するかに関して、医学と哲学は思想的基盤を共有しつつも、医学の側から「観察」をなおざりにした哲学理論が批判されているのである。特にガレノスが検討するヒポクラテスとプラトンの医学理論において最も注目すべきは理論と実践との統合、哲学と科学のせめぎあいである。ガレノスは解剖実験の成果に基づいて心身論を展開しながら、生命システムの全体的な有機的連関に目を向けている。この点を見据えた上で、ヒポクラテスからガレノスにいたるまでの医学理論における魂と身体のかかわりについて解明することが本研究の第一の主眼である。

本研究では、医学における魂概念を理解する上で、まず最初に古代ギリシア医学理論における身体観の流れを浮き彫りにし、魂の物質的基盤を提供している「四体液理論」の輪郭を描き出すことを目指している。そのうえで、とくにガレノスの『ヒポクラテスとプラトンの学説』を中心に、身体的調和についてのさらなる展開を辿り、機械論的・物質主義的な身体把握と対峙する目的論的・有機的な生命把握がそこでどのようなかたちで提示されているかを明らかにするのが目的である。

3. 研究の方法

(1) 古代ギリシア医学の集大成としての『ヒポクラテス全集』全10巻(Littré, E., *Oeuvres complètes d' Hippocrate*)、および『ガレノス全集』全20巻(Kühn, C. G., *Clavdii Galeni opera omnia*, 1986-1997²)を基礎的な資料として、さらにギリシア医学に関するVan der エイク、R.J.ハンキンソン、T.ティールマンなどの注釈・研究書や、またJ.ロングリッグやG.E.R.ロイドらの全般的な研究も参照しつつ、最近の研究状況をふまえたうえで「四体液理論」を中心としたギリシア医学研究を進めた。

(2) アルクマイオンに始まる初期のギリシア医学理論においては、身体内の諸性質の混合(クラーシス)によって健康状態が決定されると考えられていた。この身体内の混合説が「体液の混合説」としてヒポクラテス医学に受容され、後にガレノス医学において血液・黄胆汁・黒胆汁・粘液の「四体液理論」として明確に体系化された。このようなギリシア医学の「四体液理論」は、魂と物質の实在性をめぐる哲学的問題に関して、身体の有机的連関を説明するための鍵となる見解として、ギリシア哲学との緊張関係の中で理論化されたのである。そこで哲学者たちの四要素[火・空気・水・土: cf. エンペドクレス]説や四性質[熱・冷・乾・湿: cf. アリストテレス]の混合説と対比させ、その思想的連続性を強調するとともに、哲学的な抽象化とは異なっ

た方向性を持った「体液理論」の展開を、具体的なテキストに基づいて解明した。

(3)さらに、魂の場所をめぐる議論として、プラトン、アリストテレス、ストア派へと展開される一連の考察に対して、ガレノスが解剖学に基づいて検討しなおしていることについても注目した。「四体液理論」も「魂」論も、哲学から医学へと単に表層的に受容された理論ではなく、ある意味で「医学」の立場からの「哲学」批判の視点に立つもので、観察に基づく「身体」性を前提とした理論として独自の展開をも見せているものである。まさにその医学と哲学との対立と連携を読み解きながら、身体と魂のかかわりについて吟味した。

(4)このような医学史の文献学的研究を進めるとともに、ギリシア哲学思想との関連を考察した。生命システムの全体的な有機的連関を常に念頭において身体の調和を説明したガレノス、そしてさらにその理論的背景となったヒポクラテス医学の身体観が、ギリシアの哲学者達の自然理解とどのように結びついているのか(またどのような点でそれらの哲学的思考を斥けているのか)を明らかにすることによって、ギリシア医学の身体観が現代の科学的思考に対してもっている意義を追及した。

4. 研究成果

(1)古代ギリシアにおいて最も中心的な医学説である「体液理論」と対比しながら、幅広い医学史・哲学史の資料の中で、魂論との関係を考察した。「魂」は、生成変化における「内発的な力」や「創出性」を示すものとして、コスモスそのものとも同定され、また「知性的原理」としてその他の物質的位相と何らかのかたちで区別されるのがヘラクレイトス以降の思想的な流れである。そして医学思想の流れにおいても、身体を統括する知性的原理として、魂概念が特徴的に用いられてきたのであり(「ヒポクラテス文書」においては、魂概念の用例はいまだ少ないながらも、『養生法について』では、初期ギリシア哲学の思想的影響を被りつつ、魂と水や火との相互関係の中で魂の情動的側面や知性的側面について語られている)、初期の医学理論においては、身体的調和という観点から心的側面が説明されていたのである。

まず、このような魂と身体のかかわりに注目し、特に「四体液理論」がヒポクラテス以来、どのように捉えられるに至ったかを中心とした考察を進めた。ギリシア医学における「四体液理論」は、身体の有機的連関を説明するための核となる見解として、ギリシア哲学との緊張関係の中で理論化されたものである。その「四体液理論」が形成される際

にきわめて重要な役割を果たすこととなったのが、メランコリア(黒胆汁)である。血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁の四つの主要な体液のうちでも、黒胆汁は存在様態としてもそれが及ぼす作用としても複雑多岐であり、医学文書の内部でも黒胆汁をめぐる見解には大きな変容が見られる。すなわち初期のヒポクラテスにおいて、メランコリア概念はそもそも悪しき物質と解されていたのが、しだいに四体液理論に組み入れられ、さらにペリパトス派によって「傑出した才能」と結びつけられるというきわめて特異な展開をたどったのである。このペリパトス派によるものと推測されるのは、擬アリストテレス『問題集』の中の一つの論考「思慮、知性、知恵に関する諸問題」[XXX. 1]は、ヘレニズム・ローマ期およびルネサンス期のメランコリア論へと多大な影響を与えたテキストとして注目されてきたものである。このことを踏まえて、ヒポクラテスからプラトン、アリストテレス、およびペリパトス派にいたるまでのテキストを検討しながら、メランコリア概念を身体および精神の双方にかかわる全体的調和の成立・不成立という観点から明らかにした。

このテーマについて扱った国内の研究論文はこれまでほとんど見られなかった。ヒポクラテスからの思想的な流れを整理したうえで、さらにどのような論点が新たに加わることで独自の展開をみせたのかを解明した点は本研究の注目される点である。

(2)さらに本研究においてはヒポクラテスとペリパトス派の対比のみならず、従来あまり取り上げられることの少なかったアリストテレスの生理学思想(『自然学小論集』の内で、『記憶について』、『睡眠と覚醒について』、『夢について』、『夢占いについて』)および倫理学思想(『ニコマコス倫理学』、『エウデモス倫理学』)におけるメランコリア概念を明らかにし、アリストテレスによるメランコリア論と『問題集』におけるそれとの思想的連関を問い直した。それらの考察を通じて、そもそも病いの状態として語られてきたメランコリア的気質が、知性の欠如という側面のみならず、知性の点で傑出した状態という二つの側面をともに保持しうることの根拠について検討した。

(3)初期ギリシア哲学についての基本文献である G. S. Kirk, J. E. Raven, M. Schofield, *The Presocratic Philosophers: a Critical History with a Selection of Texts*, Cambridge University Press, 1983 の第6章の翻訳、およびギリシア・ローマ哲学論文集である D. Sedley(ed.), *The Cambridge Companion to Greek and Roman Philosophy*,

Cambridge University Press 所収の論文 R. J. Hankinson, "Philosophy and Science" (「哲学と科学」)の翻訳を行った。

前者の著作は、哲学のはじまりに関する資料の緻密な原典研究に基づいて、断片訳とともに問題となる議論が丁寧に論じられた一冊である。後者の著作は、ギリシア医学や天文学などの諸科学を同時代の哲学と関係づけながら考察されたもので、初期ギリシアからガレノスに至るまで哲学と科学が緊張関係にあったことを踏まえ、科学的知識(エピステーメ)がどのような根拠を持ったものとして位置づけられたのか、また観察を重視する医学の立場に対して、目的論の要請が哲学の立場から行われたことの問題点はどこにあるのかなどについて検討されている。

両著書はいずれも多方面にわたる研究を視野においた論文集であり、入門書としても専門書としてもギリシア・ローマ研究の共通の基盤として意義を有したものであり、これらの邦訳によって国内研究のさらなる充実化が期待される。

(4)本研究の成果として今後、ヘラクレイトスとギリシア医学思想についての論考の出版を、平成 22 年度に予定しており、さらにガレノスの『ヒポクラテスとプラトンの学説』第二分冊の翻訳の成果を、京都大学学術出版会より出版予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ①木原志乃、「古代ギリシアにおけるメランコリア——ヒポクラテス派からペリパトス派への医学史的展開」、『國學院雑誌』、査読有、107-12、2006、1-14 ページ。
- ②木原志乃、「メランコリコイにおける魂の運動と知性」『古代哲学研究』、査読有、40、2008、23-44 ページ。

〔学会発表〕(計 2 件)

- ①木原志乃、「melancholicoi における魂の運動と知性」、古代哲学フォーラム (イリソス会)、第 32 回、2007 年 3 月 31 日、京大会館。
- ②木原志乃、「メランコリコイにおける魂の運動と知性」、古代哲学会 (談話会)、2008 年 7 月 26 日、京大会館。

〔図書〕(計 2 件)

- ①内山勝利・木原志乃他 (共訳) [G.S. カーク, J.E. レイヴン, M. スコフィールド共著]、京都大学学術出版会、『ソクラテス以前の哲学者たち』(第 6 章「ヘラクレイトス」を木原

が担当)、2006 年、628 ページ。

- ②内山勝利 (監訳) [D・セドレー 編著]、京都大学学術出版会、『古代ギリシア・ローマの哲学』(第 10 章「哲学と科学」を木原が担当)、2009 年、560 ページ。

〔その他〕

- ①木原志乃、「ヘラクレイトス——人は何のために競うのか」、『人間会議』、宣伝会議、2006 年夏号、70-73 ページ
- ②木原志乃、「学校まかせでよいのか——自分にとっての真の価値と向き合ったソクラテス」『人間会議』、宣伝会議、2006 年冬号、104-109 ページ
- ③木原志乃、「初期ギリシア哲学の文献事情」、内山勝利編『哲学の歴史』第一巻 (中央公論新社) 所収、2008、124-128 ページ。
- ④木原志乃、「ソクラテスが説いた教育の本質」、『人間会議』、宣伝会議、2009 夏号、222-227 ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木原 志乃 (KIHARA SHINO)
國學院大學・文学部・准教授
研究者番号：10407166

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし